

一ニ位といふに四等の分有り、一位未見、二位三位ヲよしとする、四位ははふれたるとぞ、

二ツニ形といふに五様あり、富貴、艷麗、嚴格、亂雜、枯槁なり、富貴、艷麗をよしとす、

三ニ色に二種有り、咲出あかみたる様なるは珠玉咲也、あをみたる様なるは碧玉咲也、珠玉咲は花ニ光りありてよし、碧玉咲は花につやなし、又是にたがへるもあるべし、醉あり、まみ有、忍ひまみ有ルは上花の外なるべし、

四ニ重は、五ツ葩より十五葩にいたりて一重とす、廿葩より四十葩までを八重とす、四十五葩より百葩迄を千重とす、百葩の外万重とす、八重千重をよしとすとぞ、

五ニ實に形容大小高下赤白有り、白ニ黄白有り、銀白青白有、赤に薄赤、木瓜色、濃赤、薄紫、こい紫、黒色有り、形ニ瓶子有、實の首五ツにわれ、七ツにわる、あり、白は銀白、紅はこいあか、小瓶子をよしとす、芥子實、鈴實共いふ、

六ニ藥はすべて黄なり、淡濃多少長短あり、黄にして少をよしとす、

七ニ葩は厚圓薄缺有り、捏縮有、ひらめくつぼむあり、厚圓にしてつぼむをよしとす、

八ニ葉に大小長短頻縮弱垂圓尖あり、其色紫碧淡濃あり、細長にしてつよきをよしとす、兼たる色をよしとする、

九ツ木に強直なるあり、卷曲なるあり、のびやかにほそすぐ成有、すなをにのびやかなるをよしとす、

〔牡丹道<sup>第一</sup> 乾〕一牡丹と題に書てハ、紅牡丹の事に成べきか、丹の字あかしと讀バ、赤きハ花の本體也、白く咲により白牡丹、紫に咲により紫牡丹とハ云めり、又紅牡丹と云も、紫白にえらば

んがためしにあれば、重言といふべきにもあらじ、本草、時珍曰、牡丹以色丹者爲上、雖結子而根上生苗、故謂之牡丹とあれば、元來紅なるべし、群花品の中に、又以牡丹第一とすれば、世に花王